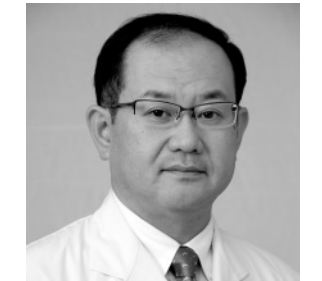




中嶋 講二さん（6期生）
スーパーうおかつ取締役
郷土史愛好家・「里見の郷委員会」事務局長



根岸 俊光さん（14期生）
株式会社ヒカリS.E代表取締役
群馬県スキー連盟副会長



江口 文陽さん（20期生）
東京農業大学地域環境科学部
森林総合科学科教授
日本きのこ学会会長



浦野 正樹さん（24期生）
バンド「勝手にしやがれ」ベース

地域文化とまちづくりをキーワードに、情報発信を続ける

「平成の大合併が進み、地域の歴史や文化が見失われてしまうのではないか」。そんな危機感から、書店経営の傍ら、仲間たちと「里見の郷委員会」を結成し、「南総里見八犬伝」のモデルとなった里見氏をはじめ地域文化の顕彰活動が続けてきた。講演会の開催とともに、2012年には研究の成果を発信する情報誌「里見の郷再発見伝」を創刊、3月には第3号を発行したところだ。

里見氏は新田氏の一族であり、新田義重にとって八幡荘（高崎市八幡町付近）は新田荘

に先行する地域だったという。その八幡荘には、里見石の巨石が石室に用いられた観音塚古墳があることから、有力な古代豪族の存在が考えられる。こうした古代から綿々と受け継がれてきた里見周辺の歴史文化に関する書籍出版の実現が、中嶋さんのライフワークだ。活動は、小栗上野介顕彰会や地域づくり団体「榛名まちづくりネット」、群馬県民レポートなど多彩な広がりを見せている。「発信を続けていかなければいけない。続けていれば、何かが起こるはず」と意気込む。

持ち前のバイタリティで事業を展開し、スポーツ支援で社会貢献

「企業がスポーツ文化を支えなかったら、他に支えるものはありません」。

企業スポーツの廃部が相次ぐ中、(株)ヒカリS.Eを経営する根岸さんは、「スポーツ支援＝企業の使命」という信念を持つ。群馬県スキー連盟副会長を務める傍ら、「2015ぐんま冬国体」へ向け社内にスキー部を持ち、クロスカントリー2人、アルペン1人の所属選手に加え、ジャンプ選手2人とスポンサー契約を結ぶ。「平昌五輪へ向けて支援を続けます」と、根岸さん。

「将来は起業したい」が高校時代の漠然とした夢。その夢へ向けて、39歳のときに一步を踏み出し独立。空調設備の会社をゼロから立ち上げた。常にお客さん目線をモットーに、自社施工と適切明解な見積、誠実な営業姿勢に努めた結果、メーカーとの緊密な関係を構築できクチコミで顧客も増えた。現在は社員55人、群馬に加え東京、埼玉、仙台などに拠点を持つ。昨年から京都市内に「京町家 雅」というゲストハウス事業など新規ビジネスにも取り組む。スポーツ支援の基盤となる企業経営も堅実だ。

きのこパワーを商品化し、人々の健康ライフに貢献するきのこ博士

「わかっているきのこの種類は国内だけでも約4000～5000種。私が識別できるのは180種程度です」と笑う。高3の時に父親に胃癌が見つかり、手術後の再発を防ぐためにカワラタケというきのこの抽出成分で作られた医薬品の投与を医師から勧められたことから、きのこの持つ力を探求したいと、東京農業大学に進学。そして、きのこの新品種を作り出す細胞融合による育種研究からスタートし、雑種作出の成果により博士号を取得した。

カワラタケから抽出された成分を飲用する

ことで、免疫細胞の中でも癌細胞を攻撃するT細胞やNK細胞が血中に増加するのを確認し、その抽出物をだれもが手軽に利用できるような機能的食品として民間企業と共同開発し商品化に成功。これを皮切りに、ハタケシメジ、ヒメマツタケ、エノキタケなどを使った機能的食品を商品化し、各種疾患への予防・改善など人々の健康をサポートする。天然物を科学的に評価し、創薬や創食資源として活用したり、地域産業の活性化につなげたりと、実学による社会貢献は海外にまで及んでいる。

ジャズ×パンク・ロック、精力的なバンド活動で疾走する

唯一無二のジャズ・パンクバンド、勝手にしやがれ。ウッドベースの浦野さんは「様々なジャンルの音楽をパンク・レベルミュージックの精神で独自の音に昇華していることが、最大の魅力ですね」と言う。ギターレス、ドラムボーカルという独自のスタイルから疾走感あふれる独特の世界観を表現。極上のハードボイルドにも似た味わいがある。

浦野さんは、高校時代からの夢だったミュージシャンになりたくて上京、一度挫折しかけたものの、1997年に勝手にしやがれを

結成し再活動。バンド結成を機に本格的にウッドベースを始めた。最新作「バンドーラー」まで、ベスト、カバー等含め14枚のアルバムをリリース。ライブ活動も精力的で、FUJI ROCK FESTIVALなどフェス出演も多数。春以降もフェス出演の予定がある。

一度聴くとジャズをベースにした圧倒的な存在感に打ちのめされることは確かだ。時代の流行り廃りに流されることのない音楽。「じいさんになっても、バンドをやりたい」という浦野さんの言葉に説得力がある。



松井 寿秀さん（25期生）
株式会社MARS Company代表取締役
※写真はJICAモロッコ事務所にて
左から2目が松井さん



霜村 誠一さん（36期生）
パナソニックワイルドナイツ

高崎発、世界の食材 ColdChain 革命！

松井さんが代表を務めるMARS Companyの革新的な食材保存技術に世界中が注目している。『蔵番』は食材を冷凍させずに一般冷蔵庫の3～10倍の長期保存を可能にした。自社開発の特殊な氷『sea snow』併用で輸送すると鮮魚が10日以上『刺身』で食せる。『長期鮮度保持が可能になればより遠くの消費地迄食材輸送が可能になる』このColdChain革命のプロジェクトは、テレビ番組でも度々取り上げられ、流通大手との提携も進んでいる。

「生産者の方々がマーケットを選ぶ時代が

くる。この技術を礎に遠隔地に若者が集い産地が活性化する。その為の技術でありたい」と夢を語る。

「本来、技術は発明者の欲を満たすものではなく、困ってる人の必要を満たす為にある。」と話す松井さん。多くの苦労がありながらも、日本の繊細な技術力を世界中に認知させ日本人として人類に貢献しなければならんという使命感でここまでたどり着いた。「技術は弱者の為に」という信念を持ち続けて、これからも挑戦を続けていく。

トップリーグ優勝で有終の美。ラグビーがくれる高揚感はまだまだ更新中

高校・大学・社会人と常にラグビーのトップステージで活躍してきた。農二では惜しくも全国ベスト16に終わったが、関東学院大学では1・2・4年次に全国大学選手権大会で優勝。2004年に現パナソニックワイルドナイツに入り、2009年度から4期連続で主将を務め、バックスの攻守の要として活躍。09年度に日本選手権3連覇を成し遂げ、10年度はトップリーグ初優勝を経験。日本代表入りして計6キャップ(国代表戦出場)を果たした。昨年11月にはトップリーグ37人目となるリーグ戦通算100試合出場を達

成するなど輝かしい実績を残した。

今年2月1日、センターバックとして出場した現役最後の試合でトップリーグ2季連続優勝という有終の美を飾った。

普段は温厚で控えめな人柄だが、「スイッチが入るとアドレナリンが噴出します」と笑う。「ラグビーを通して学んだ仲間を大切に思う心、恩師や家族への感謝の心など人として大切なことを、教え子たちにも伝えていきたい」。この春より高校生からの夢だった教師への道を歩む。(4月より桐生第一高校教員)



同窓生のお店・会社紹介

介護施設 とねりこ



阿部 光廣さん（5期生）
渋川市八木原948-2
TEL：0279-25-7500

昨年3月1日に開所した住宅型有料老人ホーム＆デイサービスの『とねりこ』。阿部さんは、父と兄がやっていた医院を改装して、高齢化社会のニーズに応えようと第二の人生を踏み出した。

施設は「優しさ」をテーマにした少人数制で、アットホームな雰囲気が魅力。入所者目線のあたたかく行き届いたサービスは、入所当時より心身ともに良好な状態に向かうと利用者やご家族から好評だ。加えて料金もリーズナブルで、喜ばれている。

たんぽぽ家



持田 敦史さん（29期生）
高崎市東貝沢町1-17-2
TEL：027-362-0327

東貝沢町にある隠れ家的なお店。おいしく食べて健康になる食事こそが本物と、県産では増田牛、多胡の里豚、有機野菜など、生産者の顔が見える良質な食材にとことんこだわる。店内に入って左にある釜土もこだわりのひとつで、ご飯が本当においしく炊き上がる。お客様を笑顔にしたいという思いが原動力。

昨年の12月で10周年を迎え、口コミでお客様の入りも上々。なかなか手に入りくい日本酒「而今」「磯自慢」も味わえる。

welcome to my shop

大阪らあめん 麺の司



望月 盾司さん（25期生）
前橋市総社町高井226-1
福島ビル107
TEL：027-212-7496
※ビリケンさんを挟んで大阪出身の奥様と

ラグビーの聖地花園でベスト8に輝くも悔いを残した大阪。因縁の地で修業を積みラーメン道を極めてきた。そして昨年10月、故郷前橋に店舗をオープン。

豚・鶏・魚介からダシをとった醤油ラーメンは、国府白菜と国産豚の甘いハーモニーが絶妙。豊かな食材の旨みを凝縮したスープが自慢の味噌ラーメン。どちらも“こっさり”(こってりとあっさりの中間)な味わい。化学調味料不使用の手間を惜しまないラーメンをぜひご賞味あれ。

高崎包装



小山 敦史さん（34期生）
高崎市江木町588-2
TEL：027-325-1774

お弁当容器、フードバック、業務用洗剤など飲食にかかわる資材や、リボン＆ラッピングなど“包む”にこだわった資材の専門店として、高崎エリアを中心に卸と小売業を行っている高崎包装。100坪の店内に1万点のアイテムが並ぶ。

家業は敦史さんで2代目となる。“お客様の顔が見える商売”をモットーに、地域に愛される店舗づくりをめざす。良質な品を納得の価格でお客様に迅速に提供し、信頼に応えている。